

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ポレーシエ

・ ・ たくさんの困難を乗り越えて ・ ・

ナロジチ病院 暖房工事が完了しました！

いつもより早い冬の訪れ、物価の急騰、
救援用工具の引き渡しに対する障害、地
方行政の怠慢等、さまざまな困難を乗り
越えて、またひとつ私達の救援が、目
に見える形となって実現しました。



【原さん（ナロジチ病院にて）】

こんにちは。ナロジチ病院の暖房に関
して、お知らせします。昨日（11月17日）
ナロジチ地区行政・衛生局・フェニッ
クス社・ナロジチ病院長・公共サービスの
代表からなる委員会が、暖房の稼働を決定した事をお知らせします。公共サービス
機関が、ガスの節約をしているため、病院の入院棟や外来棟・家屋等の温度は十分
いとは言えません。しかし、屋外では氷点下になるうかというこの時期に、ラジ
エーターには命が吹き込まれ、病院内の温度は今、『プラス16度C』になってい
ます。日本の皆さんの支援に心から感謝いたします。（移住基金より）

10月20日、原さんは、やり遂げた充実感からか、疲れも見せず元気に帰国しました。
次のページに原さんの報告があります。是非、読んでください。（J）

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：中島しぐれ

郵便振替：00880-7-108610

☎/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:30～15:30）

ナロジチ病院 第二期暖房工事 奮戦記

＝鼻水の向こうに熔接火花と未来が見える＝

南箕輪村 原 富男



工事は、現地の工事会社「フェニックス」社が担当し、既に 9月19日から始まっていた。僕は、10月 2日から20日までの19日間、実際にウクライナを訪れ、工事に参加しながら、この目でその完成を確認する決意で臨んだ。

今回の訪問では、工事用機材のない現地事情を考慮し、【完成した暖房器（全部で 147台）】「ねじ切り機・ハンマードリル・切断機等」約 110キロの機材を持参した。運賃節約のため、重い物を手荷物にしたため、肩の骨がきしむ。関空でのチェックイン、ウーンでの機材の受け渡しも順調だったが、ウクライナのボリスポリ空港の税関は、「そうは問屋が卸さない！」。

機材を無税にするために準備した、「在日ウ大使館の書類」や「人道支援委員会用の書類」も全く通じない。機材は車ごと封印され、決定がおりるまで（結局帰るまで）使えない事になった。

通訳の竹内さんと僕は、即日、ナロジチ入りした。その夜、ナロジチに初雪が降り氷も張った。院長さんの家はペチカを焚くのでメチャ暖かく、外との温度差で僕は風邪をひいた。翌朝、竹内さんはキエフに帰り、ナロジチで日本人は僕だけになった。工事はまだ半ばで、各フロアには取り外したラジエーターが積み上げられていて、一目見て使えない物もある。僕は、前回の工事で顔見知りとなった職人がいるものとはばかり思っていたが、全員初顔ばかりで戸惑った。初対面同士で、お互いに表情が硬い。仕方なく、ばらしたパイプの後片付けから始めた。長くて運べないパイプを「グラインダーに切断歯を付けた機械」で切断していると、「使うな！」と言われた。切断歯は貴重品だから「取り外したパイプの切断には使わない」のだ。報告用の写真やビデオを撮りながら、一日目が終わった。2日目からは要領もわかり、壊れたラジエーターの代替品の「レジスター（写真）」を作った。75mm径のパイプを熔断し、片方の小口は丸い鉄板を熔接して塞ぎ、反対の小口にねじパイプを熔接する。同じ物を2本作り、2本を循環パイプでつなぐと出来上がりだ。構造はいたって簡単だが、限られた工具で手作りするのは楽じゃない。熔接機で切断したパイプの小口は変形してしまうため、ハンマーでたたいて平らにする。僕は、この仕事をフセインによく似た職人と一緒にした。風邪をひき、熔接用のお面の中に『鼻水がこぼれ、鼻水の向こうに火花が見える』状態の僕に、フセインは「寒いだろう」と自分の作業着を脱いで着せてくれた。僕は、職人達にメジャーとさしがねをプレゼントした。「さしがね」は珍しがられうけた。

ある日、殴り合いの喧嘩を見た。仕事場の目の前で、元アフガン兵役の「病院専属自動車修理工」と、酔っ払った近所の若者が、口論の末殴り合いになったのだ。若者には職もなく、病院に出入りしては、煙草をせびったり職員を冷やかしたりしている。また今回は、地方行政の役人が一度も顔を出さなかった。「喧嘩」も「行政の態度」もナロジチの現実である。

休日に、僕は病院のまわりを散策した。川には鴨やアヒルが遊んでいる。どの家にも家畜小屋があり、山羊・牛・馬・鶏・家鴨を飼っている。家の裏は、300坪ほどの畑になっている。

お年寄りが、「足を引きずりながら」最後の収穫をしていた。（完）

ウクライナ⇄日本 <情報ホットライン>

10/6 ウ⇄日 ・ **緊急!!** ナロジチ病院の暖房工事に関して…ロシアの経済危機は、ウクライナの経済情勢にも深刻な影響を与えています。購入しなければならない資材の値段は急騰し、例えば、配管の値段は、750～870グリブナ/1トン当たり(8/31)でしたが、9月に入り1,800～3,000グリブナにもなりました。パイプだけではなく、熔接用酸素や電極熔接材などもそうです。財政



【フェニックス社の職人と原さん】
難と経済危機のため、ナロジチ病院の工事は事実上止まりつつあります。もちろん、移住基金はあらゆる努力をします。しかし、あなた方の支援なしで、ナロジチ病院の暖房工事を完成させる事は不可能です。

10/7 日⇄ウ ・ 工事費の追加支援を訴えるファックスを受け取りました。あなた方の直面している困難はよくわかります。しかし、この問題はこちらの運営委員会で十分討論しなければなりません。どれ程の追加資金が必要なのか、詳しい情報を教えてください。

10/7 ウ⇄日 ・ 資材の物価急騰により、9月3日から7日にかけてフェニックス社が資材を購入した時点で、資材費と給料に当てるべきお金のすべてが費やされました。フェニックス社が4,800G立て替えて工事は継続されていますが、他に作業員の給料と税金を合わせた12,400Gを加えると、追加費用として必要な金額は、17,200Gになります。(注:10月7日現在…120円/\$;3.41G/\$として約60万円。詳しい経過説明がありました。)

10/9 日⇄ウ ・ 詳しい説明をありがとう。あなた方のおかれている状況を理解する事ができました。しかし、必要な追加資金はかなり高額です。運営委員会でも提案が出ましたが、問題解決の一つのアイデアを紹介しましょう。ナロジチ病院の今年度の医薬品の予算は、総額200万円(約17,000\$)ですが、この中から暖房工事費を確保し、残りを医薬品に当てるというやり方です。それでもいいですか?もし、あなた方とナロジチ病院、そして、こちらの政府(外務省)がこれを承諾するならば、すぐにお金を送る事ができます。

10/9 ウ⇄日 ・ もちろん私達は、ナロジチ病院の医薬品に向けられたお金を、暖房工事完成の費用に転用する事に同意します。いつ、あなた方は政府の承認を受ける事ができますか?

10/14 日⇄ウ ・ ナロジチ病院へのグッドニュース! 私達の政府が、「ナロジチ病院の暖房工事費の追加分を医薬品代から転用しても良い」と同意しました。私達は、すぐに追加分の60万円を送る事にしましょう。

10/20 ウ⇄日 ・ 私達は確かにお金を受け取りました。私達は、明日そのグリブナをフェニックス社に支払います。またひとつ困難を乗り越えました。原さんが、すべての仕事を終え、無事帰国する事ができて本当に良かったと思います。(次号に続く)

第2回スタディ・ツアー募集 !! のお知らせ その2

「ポーシェ47号」でお知らせした、
ツアー募集の内容は次のとおりです。

期 間：1999年8月下旬の金曜日出発、
翌週の日曜日帰国（10日間）

参加費用：20名以上で団体扱いになります。
一人あたり約25万円程度。

募集人員：20名以上！

訪問予定場所：

「移住基金事務所」

私たちの現地カウンターパートであり、訪問時には基点になります。キリチャンスキー氏やドンチェヴァさんが働いています。

「ゼレムリヤ村診療所」

汚染地から移住してきた人々が住むゼレムリヤ村で、村人の健康管理を行なっています。

「州立小児病院」または「市立小児病院」 被災児童が利用している医療機関。

「州立孤児院」

0歳から3歳までの被災児童が収容されています。

「ナロジチ地区病院」

汚染地にある病院、給水給湯設備工事と暖房設備工事を行ないました。

「ナロジチ消防署」

今も放射能汚染地で発生した火災の消火活動に出掛けています。

「ジトーミル消防署」

ジトーミル州にある消防署の中央機関です。春に来日したアントニュークさんやトビャンスキーさんが勤務しています。

「作業者協会」「障害者協会」

放射能の後遺症に苦しんでいる事故処理作業者（リキレーター）のためにできたボランティア団体です。

「チェルノブイリ原子力発電所」

1986年4月に地球規模の大爆発を起こし、今も放射能を放出し続けています。

「ペンフレンドとの出会い」

手紙を通して知り合い、支えてきた人々に会い、スキンシップをします。

そのほか、ジトーミル流の「休日を楽しむ方法（ピクニック）」も体験できるかも知れません。

訪問したいところはたくさんありますが、移動するだけで半日というとにかく広い国なので、参加者の希望を踏まえ、途中二班に分かれて別々の場所を訪問することを検討しています。

私たちは、この「第2回スタディ・ツアー」の計画をきっかけに、改めてウクライナについて勉強しようと考えました。そして来年1月より「ウクライナ講座」を開く予定で既に会場も押さえました。

ポーシェ誌上で現地の様子はお知らせしてきましたが、ダイレクトに質問を受け今まで以上に理解していただくために準備を進めています。皆さまの参加をお待ちしています。



＜キエフ市内 アンドレイ寺院の前で＞

第一回 99.1.16 (国際センター)

「8000キロのかなたウクライナはヨーロッパ？」

第二回 99.2.20 (伏見ライフプラザ予定)

「ウクライナ人はどこから来た？」

第三回 99.3.20 (伏見ライフプラザ予定)

「ウクライナの政治・経済のゆくえ」

第四回 99.4.17 (伏見ライフプラザ予定)

「チェルノブイリ原発事故」

第五回 99.5.15 (国際センター)

「ウクライナ料理ボルシチを作って食べましょう」

第六回 99.6.19 (国際センター)

「ウクライナの人々の暮らし」

第七回 99.7.17 (国際センター)

「ウクライナの歌を歌いましょう」

第八回 99.8.7 (国際センター)

「チェルノブイリ・スタディ・ツアー」

第九回 99.9.18 (国際センター)

「ウクライナ文学を読みましょう」

第十回 99.10.16 (国際センター)

「華麗なるキエフバレエ」

第十一回 99.11.20 (国際センター)

「ウクライナ語で話しましょう」

第十二回 99.12.18 (国際センター)

「ウクライナ・なんでもコーナー」

【講座開催にあたって】

この講座は、ウクライナという地理的にも情報の面でも遠い国を、自分たち自身で調べ、その文化を知り、ウクライナの人々と交流することで、より身近に感じ、人々との友情を深めて理解し合うために行なうものです。また、1986年に起きた同国チェルノブイリ原発事故により、今なお病気で苦しむ子供たちをはじめとする放射能被災者への援助や、交流を通しての支えになればと願うものです。

【日時】 毎月第3土曜日

午後1時30分～4時

【場所】 国際センター

伏見ライフプラザ(予定)

【会費】 資料代、会場費、ゲストの交通費など、実費を参加者で割る(500円程度)

【主催】 チェルノブイリ救援・中部
ウクライナ講座プロジェクト

【後援】 名古屋国際センター(申請中)
ウクライナ大使館()

【お問い合わせ】 チェルノブイリ救援・中部

ウクライナまたはチェルノブイリに関心のある方は、誰でも参加できます。ウクライナからの留学生や在住の方もゲストに招き、楽しい講座にしたいと思います。お気軽にご参加下さい。

Центральна та Південна Київщина



チェルノブイリの少女カーリーナ・後編（『チェルノブイリの子供たち』より）

（※ カーリーナ…スイカズラ、ガマズミ科）

E. グツァーロ作（山崎タチアナ訳）

（前編のあらすじ）チェルノブイリから来た少女カーリーナと友達になったリュボミールは、家のそばのカーリーナの木にリボンを結び、いつも彼女のことを考えています。元気のないカーリーナのためにハチミツなどを届け、どこかに行こうと誘っても彼女は家から出ようとはしません。

ある日お母さんが「もうひとピン、ハチミツをチェルノブイリからのお嫁さんに渡しておいで」と言いました。「やせていて治療が必要なのに、親は出稼ぎから戻ってこないし、ヤブドーハおばあさんも体が弱っていて、病院に連れていけないんだから。ところで、もうすぐカーリーナの実が熟すから彼女にあげましょう」



ハチミツを持ってきたリュボミールは少女に言いました。「カシタン（栗）の花が咲いたよ」「うそつき。カシタンが咲くのは春でしょ。もうじき秋だもの」「春にも咲いて二度目だよ。信じないなら見に行こう」「信じないわ。私を家から出させるつもりでしょう」「じゃ君を抱っこして運んでやるよ」「どこへ？」「カシタンの木まで。自分の目で花を見るため」

その時突然カーリーナは泣き出しました。「なぜ泣いているの？」びっくりしてリュボミールは聞きました。「知らない。勝手に涙が出てきたの…」—どうして彼女は行けないのか。本当に抱いて運びたい気持ちなのに。「家のそばのカーリーナの実が赤くなっているよ。木の実とを手伝う？」「手伝うわ…」

リュボミールはずっと彼女のことを考えています。青いスカーフの彼女が目の前に浮かび、どこへ行っても心の中で彼女と話しています。彼はチェルノブイリのことやチェルノブイリの人々の話を聞き、その災難のことをよく知っています。カーリーナが笑わないのもそのためでしょう。お母さんとおばあちゃんが、カーリーナの血が悪くなったと言っていました。彼女の血を全部替えれば、生まれ変わったように元気になるでしょう。だからいいものをいっぱい食べさせなくてはなりません。ハチミツも木の実も牛乳も。

でも、今の牛乳は健康に良いのでしょうか。木の実は大丈夫でしょうか。今は畑のじゃがいもやビートを食べるのも、井戸水を飲むのも怖いのです。元気な人でさえ病気になると言うのに、病気の人はおおさらです。「うちのカーリーナの実は役に立つの？木の実は安全なの？」「役に立つとも、カーリーナの実はいいものだよ」

リュボミールはいつもいつも彼女のことがばかり考えていて、何を見ても彼女に話しかけたり、教えたりしています。例えば、雑草だらけのホルホーズの庭でキツネに会った時のこと。リュボミールはちょうどリンゴをもぎ取ろうとしていました。キツネは彼を見て、においをかいでからゆっくりと草むらへ姿を消しました。カーリーナと二人なら追いかけていけたのにと、残念に思いました。「ね、カーリーナ！」と、まるでそばにいるかのように声をかけるのです。

秋が深まり、村では結婚式があって、音楽家の楽器はまるで太陽のようにまぶしく輝きます。結婚式の音楽が聞こえ出したら、リュボミールは音楽を聴きたくて走っていきます。その音楽は不思議なことに、楽器から出ているのか、人の心から流れ出てくるのか。音楽が流れて、流れて、思わず踊り出します。カーリーナだけがそばにいません…「君はどこにいるの？」心の中で聞きます。

村中を結婚馬車が走ります。馬は花飾りを着けて、新郎、新婦の前には小麦粒や小銭やキャンディーが投げられます。刺繍した布に乗せられた大きな丸いパンはカーリーナの実で飾られています。おんどりも大きな声で歌い、小春日和の中、歌声が響きます。そしてリュボミールはカーリーナの家まで走ります。古い玄関は閉じられ、ヤブドーハおばあさんもカーリーナの姿も見当たりません。彼はドアをたたき、窓から覗き、畑を探し、桜の木の下を探しましたが、どこにもいません。「いったいどこにいるの？」彼は花壇の腰掛に座り、待ちました。今にも垣根の入り口に現れる気がしたのです。結婚式で拾った赤いネックレスをカーリーナにあげたかったのに…。結局ネックレスは、自分の庭のカーリーナの木に飾りました。まるで少女の首飾りのように。そばを通る度にカーリーナが彼を見送ったり、出迎えたりしているように。いったいどこへ行ってしまったのか…。

ある涼しい秋の朝に、お母さんが言いました。「リュボミール、今日はカーリーナの実を取ろうよ。私のチェルノブイリのお嫁さんがそばになくて残念だけど、手伝ってもらえただろうにね」「あの子はどこ？」「知らないの？病気で、血液が悪くてね、おばあさんとキエフの病院へ言ったよ。もう一週間も経つよ。やれやれ」リュボミールの心が凍りつきました。—だからヤブドーハおばあさんの玄関が閉まっていて、誰もいなかったんだ！お母さんに自分の悲しい目を見られないように、ラズベリの茂みの中に隠れました。

しばらくして、大きな籠を持ったお母さんがカーリーナの木に向かってるのが見え、ラズベリの茂みから飛び出してカーリーナの木の前に立ち、「取らないで！」と言いました。「ママ取らないで、お願い！」「どうしたの、もう実を取る時期だよ」その時、木のネックレスに気づきました。「あんたが着けたの？」「僕だよ」「木が女の子のように？」「女の子のように…」「お嫁さんのように？」「お嫁さんのように…」「今日まで気づかなかったわ」「カーリーナが退院するまで待とうよ。直ったらそのとき一緒に取ろう」「これはあんたのカーリーナね？大事なものね」「大事なものなんだ…」お母さんはため息をついて家に戻りました。

リュボミールは泣きながら赤い実とネックレスの木の下に座りました。木は少女のようです。チェルノブイリから来たカーリーナのようです。お母さんは玄関に籠を置き、そして悲しそうにため息をつきました。彼女の息子リュボミールは頭を垂れてしょんぼりしています。木はまるで少女のようです。チェルノブイリから来たカーリーナのようです。（おわり）



履歴書

私、ゴレヴォイ・ヴィクトル・アレクサンドロヴィチは、

1946年11月5日、ジトーミル市において事務職員の家庭に出生。

1953年、学校に入学。1964年に卒業。

1965年、キエフ体育・スポーツ専門学校に入学。

近代5種競技のスポーツマスター（注1）、
ソ連邦チャンピオンになる。

専門学校卒業後、トレーナーとして勤務。

1969年から1971年まで、ソヴィエト軍隊に所属。

1971年、派遣証明書により、バム（注2）建設に出張。建設工事従業員として勤務。

1981年、ジトーミルに帰り、結婚。建設労働者として働く。

1986年、軍隊での再訓練が認められ、チェルノブイリに派遣される。チェルノブイリ原発事故後、3号機および4号機の（修復、石棺の）組立、据えつけ、及び除染作業を遂行。チェルノブイリ原発での作業に3.5カ月間滞在。チェルノブイリから医療衛生大隊付属診療所へ、その後治療のため病院へ送られる。

1988年、労働能力喪失者身分の認定をうける。

チェルノブイリ後、妻は私と離婚した。現在、私は84才の父と共に生活している。子供は無い。健康状態は絶えず悪化しており、新しい病気が発現しているが、より良い状態を望みつつ生きている。

1998年10月3日

署名： ゴレヴォイ・ヴィクトル・アレクサンドロヴィチ

（訳注1：全ソ連等級基準により、上級選手に与えられる称号）

（訳注2：バイカル・アムール幹線鉄道）

（注：ゴレヴォイ氏は、現在チェルノブイリ障害者協会に所属。1998年1月に贈った車椅子の受領者の一人である）



チェルノブイリ救援・中部の収支報告(1998年4月から1998年9月まで)

収入の部

項目	金額(円)
前期繰越	11,133,806
救援寄付金	小計 7,581,550
(内訳)	個人 (379件) 3,813,037
	団体 (12件) 3,768,513
国際ボランティア貯金交付金	6,560,000
外務省ODA補助金	0
運営費関連	小計 940,101
(内訳)	個人 (111件) 469,101
	団体 (8件) 471,000
物品売上げ等	115,205
預金利子	9,116
収入総額	26,339,778

支出の部

項目	金額(円)
救援物資関連	小計 919,550
(内訳)	医療機器代 78,982
	医薬品代 110,925
	救援物資 *1 556,463
	輸送費 173,180
特別事業費	小計 5,809,534
(内訳)	事故処理作業者招聘 1,418,532
	ナロジチ病院暖房設備費 2,510,000
	移住基金業務委託費 570,838
	専門家派遣費(第一次) 873,415
	専門家派遣費(第二次) 436,749
運営費関連	小計 2,684,866
(内訳)	郵送費・通信費 540,750
	電話代 270,143
	印刷費 335,430
	国内出張費 79,130
	会場費 12,800
	会議費 4,918
	消耗品費 66,655
	人件費 788,840
	家賃・光熱費 262,962
	振込手数料 60,438
	物品購入費 135,537
	広告宣伝費 10,710
	リース代(コピー機) 24,990
	翻訳料 80,000
	雑費 5,951
	為替差損 1,872
	物品代返金 3,740
総支出	9,413,950
次期繰り越し	*2 16,925,828
支出総額	26,339,778

*1 原さん工具代

*2 繰り越し残高が多い理由

ボランティア貯金交付金受け入れが7~9月に集中(656万円)したが、この執行が10月にずれこんだため。また、今年度から外務省補助金交付が後払い制になったため、自己資金(約1000万円)確保の必要あり。

※以上のとおり報告します。

※上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

チェルノブイリ救援・中部 会計担当: 松田幸枝
会計監査: 南 和也

あれは2年半前。1996年4月の末、第一回チェルノブイリ・スタディツアーのメンバーをボリスポリ空港に送ったあと、私は一人残りキエフでホームステイすることになっていた。日本の旅行社で契約し、迎えに来るはずの約束がどうなってしまったのか連絡も取れず、ウクライナの空の下、ホームレスになってしまった。

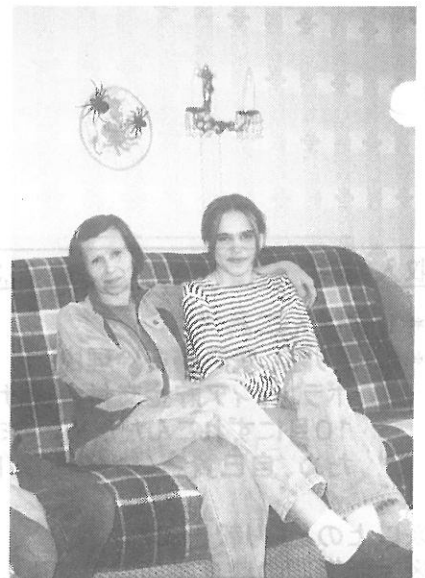
「この国では何が起こるかわからない」という忠告を、その頃の私はきちんと受け止める心のゆとりもなく、スケジュールの第一歩でその何かが起きてしまったのだ。「ウクライナでよくある架空のビジネスだ！」とジトーミルの見送りの人々は色めき、たくさんの人達に早速迷惑をかけることになってしまった。

その時「家に泊まってください」と地獄に仏、セルゲイ君の父ユーリさんの暖かい言葉がどれほど心にしみたことか。その後ステイ先とやっと連絡が取れ、私の「ウクライナ語学習」という名目のホームステイが次の日から始まった。

ステイ先は、大学で教えているナターリアさんと13才の中学生の息子パーシャ君の二人暮らしで、旦那さんのミーシャさんはハリコフに単身赴任中。住居はキエフ市ドニエプル川左岸にある新市街地の7階建て集合住宅2階。部屋は2つ。居間と子供部屋、小さなキッチンとバス・トイレ。私が子供部屋を借り、彼らはどうするのか気になったが、そういう契約だ。家の中には電気掃除機はあるが、洗濯機はない。勤めているナターシャさんは、夜、シーツも皆手洗いしている。ウクライナでは昼食がメインなので、彼女は前夜か朝早くスープからのご馳走を用意して出かける。パーシャは学校から昼に帰ってきて食事を温め、「キョーコさん、お昼をどうぞ」と呼んでくれる。じっとして食べさせてもらう居心地の悪さに、後片づけを手伝おうとすると、「ダメ！」皿洗いは自分の仕事だという。とてもよくしつけられていて、優しく素直ないい子だ。

そんなわけでウクライナ語の勉強が目的だったわけだがナターシャは仕事に出かけていくし、帰ってくるとたくさんの家事が待ち受けており、十分な勉強時間が取れない。しかし同じ女性の身としては心情的に強く要求しにくい。「甘いな」と思いつつも「ま、いいか。今回はウクライナの人々や生活、街を見るためとするか」と自分を納得させる。日本でロシア語とウクライナ語の、初歩のさわりぐらいしか学習していなかった私と、英語ができないナターシャがロシア語のポケット辞書だけで会話し、それでも「何が言いたいかわかるよ」と通じてしまうのは同じ年のせい？カンのよさ？ともかく語学以上に学ぶことの多かったホームステイだった。

しかしその後待ち受けていた危機については、いつかまた機会があればということにしよう。



<ナターシャさんとパーシャ君>

ありがとう! たくさんのメッセージ

この1年たくさんの方々によってチェル救の活動は支えられてきました。事務局に送られて来た手紙や振込み用紙(カンパの通知)に添えられたメッセージを読み返し、つくづくそう感じます。時折、この活動が人の心に届いているのだろうかと不安になりますが、これらのメッセージを読むと、そんな不安は払拭され、励まされます。また、多様な困難さを抱えられている方々が、「チェルノブイリの人々」への深い思いを持ち、彼らを支援し、あるいは共に生きていることを教えてくれます。今年寄せられたメッセージをほんの一部ですがご紹介します。そして、これからも、たくさんのメッセージをお寄せくださいますようお願いいたします。(山盛)

★ガリーナとの文通、もう何年になりますでしょうか。今互いに my sister と呼び合う程の仲です。3年前阪神大震災で私が娘を亡くした折、彼女がどれ程私を支えてくれたことか。チェルノブイリ被災の方々を励まそうとか支えようとか、そんな思いなど今の私には全く無縁です。彼女は私の友であり、又妹であり、そういう意味で彼女は私の人生の一部です。そのような関わり合いのきっかけを与えて下さった貴会には本当に心から感謝しています。

(奈良市・M・Aさん)

★毎日、とは言い切れませんが「今日はウクライナの人達のために一日仕事をしましょう」と仕事机に向かう気持ちを寄付金に託しました。

(名古屋市 T・Sさん)

★いつもポレーシェありがとうございます。3月から4月にかけて、体調を崩して入院をしました。持病があり、入院費も家計に大きくひびき、まさかの入院でしたので、貯金もほとんど無い私にとって、つらい日々でした。なかなか、いいえ全くお金をお送り出来ていないにもかかわらず、私の事を覚えていて下さり、ポレーシェを送り続けてくださって本当にうれしかったです。……これから入院費を返していかなければならないので、大変ですが、お金は無くなっていても、心はいつも明るく、決して貧しくならないように笑顔を忘れないでいきます。

(弘前市 T・Nさん)

★ミルク・キャンペーンに対しボランティア貯金の援助が打ち切られたとのこと、低金利時代の今日、仕方がないとはいえ、ウクライナ、ベラルーシの放射能汚染地帯とその周辺の被災者の皆様の、かつてない厳しい経済状態を思うと、全く心が痛みます。厳しい冬を前にしてどうしていらっしゃるのでしょうか。及ばずながら今回はミルクキャンペーンに2口分送金します。これで皆様に多少共冬の寒さが緩され、且つ小生自身の心の安らぎになればと念じつつ。

(東京都 K・Yさん)

★私達にとってもっともっと身近に感じられるようになるように、子ども達が少しずつためたお小使いの中から出しました。これが最初の1歩になるように。(名古屋市 Sさんご家族)

<郵政省ボランティア貯金の 会合に参加して> 中島しづれ

10月29日 メルパルクにて東海郵政局NGO
懇話会が開かれました。

「救援・中部」からは、会計の松田さんと私の二人が参加しました。前半は、郵政省の国際ボランティア貯金担当の佐野さんから、申請書記入の注意についてお話があり、チェルノでボラ貯を担当する、神野さんのご苦労がよく解りました。

後半は、各NGOから「国際送金時の安全とスピード化に尽力して欲しい」「第三種郵便物の条件を充たしていなくても、優遇措置をしてもらえないか？」などの要望が出されました。

10月30日 名古屋市公会堂にて、昭和郵便局主催のNGO報告会が開かれました。

「CANヘルプタイランド」と、「救援・中部」が報告をしました。河田事務局長が救援の経緯を話され、私は、スライドを使って「現地訪問の様子」「救援物資が確実に届いていること」「顔と顔の見える活動であること」などを知っていただきました。

最後に、国際ボランティア貯金に加入してくださっている方々、そして各郵便局の窓口できめ細やかに加入を呼びかけてくださっている皆様に、お礼を申し上げます。この超低金利時代にもかかわらず、毎年給付を受けていることのありがたさを、しみじみ感じました。

《事務局便り》

- ☆10月26日 郵政省視察調査員の高田恵子さん来訪。一週間後にはウクライナ等へ視察に出発。
- ☆ 27日 犬山中学の生徒さん9名が「チェルノブイリ」学習に来訪。河田事務局長が対応。
- ☆ 29日 多度中学の生徒さん12名が「チェルノブイリ」学習に来訪。事務局長が対応
- ☆ 同日 東海郵政局NGO懇話会。中島代表と松田が参加。
- ☆ 30日 昭和郵便局NGO報告会。事務局全員と大島さん、渡辺さんが参加。
- ☆11月 3日 運営委員会。一宮。
- ☆ 7日 会計監査。南さん、事務局長、松田。

以上は、この間の事務局対応の日誌です。超多忙だった事務局長が真っ先に、続いて事務局全員が、風邪をひきました。みなさま、どうぞ風邪にご注意を。
(松田)



<昭和郵便局にて(98.4.22.)>

編集後記

- ウクライナの大地は確かに遠いが、私にとってウクライナの人々はとても身近なのです。幾人もの知り合い、いくつかの家族と、確かな糸で結ばれているのです。(京)
- 流星群が近づいた。放射能、ダイオキシン、オゾンホール、環境ホルモン、汚職…。あまりの変貌に星の一言、「あなたは、まだ生きているの?」「…さあ、どうかな…」(美)
- 「自民党」と「自由党」が手を組み、「自自連立」政権が発足した。「我が春」を謳歌するためには、「天敵」とだって手を組むと言うことか? 誰かが「自由自在」政権だと言った。私は「自暴自棄」政権がらさわしいと思う。(J)

“ぼらんていあ・第一印刷(株)”